親の言うこと聞く子ほど「成績が下がる」ジレンマ 真面目に授業に出ているのになぜ伸びないのか

東洋経済 TOYOKEIZAI ONLINE

2024/1/18(木) 9:41 配信

先生や親の言うことを聞いて勉強しているのに、なぜ成績が伸びないのでしょうか
（写真： kapinon / PIXTA）

先生の言うことをよく聞いて、真面目に授業に出ているのに成績が伸びない。いったいなぜなのでしょうか。その理由について、リーダーシップコーチング協会理事であり、漫画「ドラゴン桜」の編集担当としても活動する現役東大生の西岡壱誠氏は、自分で考えて答えを導き出す力が乏しくなっているからだと説きます。『教えない技術 「質問」で成績が上がる東大式コーチングメソッド』を上梓した西岡氏が、子供の成績を伸ばすために重要なポイントを解説します。

【写真】『教えない技術 「質問」で成績が上がる東大式コーチングメソッド』（西岡壱誠著）では、子どもが自ら勉強したくなる技術を紹介する。

「親や先生の教えをよく聞く『良い子』ほど、試験本番で失敗する」という話を知っていますか？

どれくらい浸透しているのかはわかりませんが、実際にいろんな高校の先生・塾の関係者から聞く話です。

■良い子ほど成績が伸び悩む

普通は逆ではないか、と思う読者も多いのではないでしょうか。先生の言うことや親の教えを聞かない子は、勉強はせず、成績も悪いイメージがあります。対して先生や親の言うことをしっかり聞いて、真面目に授業に出ている生徒は、成績が上がりやすい優等生のイメージがあると思います。

実際、小さいときにはそれでうまくいく場合も多いのですが、そこから歳を重ねて中学生・高校生になってくると、「良い子」のほうが成績は上がらない・伸び悩むことが多いです。 みなさんからすれば、**「良い子」=「親や先生の言うことをちゃんと聞く子」**

というのは、一見とてもいい生徒に思えるかもしれませんが、こうした生徒には１つ弱点があります。それは、「自分で答えを考える主体性が育たない」ということです。 良い子は、親や先生から「答え」をほしがり、その答えを自分で考えずに「正しい」と受け入れてしまうので、自分で答えを考えることができなくなる場合があるのです。

例えば、「imply」という英単語があります。この英単語の日本語訳は「暗示する」ですが、ある生徒が単語テストでこの単語の答えを「ほのめかす」と書いていました。　当たり前ですが、「暗示する」というのは「ほのめかす」という意味なので、これは正解になります。でも、その生徒が回答を丸つけするときに、「ほのめかす」と書いた自分の回答に×をつけていました。
「先生から配られた答えのプリントには『暗示する』と書いているから、『ほのめかす』は間違いだと思った」 とのことでした。
その生徒はそこそこ成績がよい生徒なのですが、かなり伸び悩んでいました。きっとその原因は、先ほどお話しした通り、主体性の問題なのだと思います。「親や先生の言うことが正しい」とだけ考えて、「暗示する」と「ほのめかす」が同じものだと考えることができなくなってしまっているわけです。

■相手の意見を 100%正しいと受け取る

　また、最近「西岡先生、自分はどういう場所で勉強したらいいと思いますか？」と聞いてくる生徒がとても多いです。

正直、どこで勉強してもいいと思うし、個人個人の答えは分かれると思います。「絶対に自室がいい！」ということも、「自習室で勉強しないと必ず落ちる！」ということもないでしょう。でも、彼ら・彼女らは「どこで勉強するか」ということに関しても「答え」がほしいのです。　そして僕が「やっぱり自習室で勉強したほうが捗ると思うよ！」と言った場合、「わかりました！　じゃあ自分は自習室で勉強するようにして、家では勉強しないようにします！」と答えます。

相手の意見を100%正しいと捉えて受け入れて、「自分はこうしよう」「ここの部分は参考にしよう」という自分なりの答えを考えないわけです。こういう場合、やはり最後の最後で成績が伸び悩んでしまうんですよね。　以上のことから、先生や親から正しい「答え」を求め、思考を止めているうちは、成績はなかなか上がりません。　自分なりの「答え」を出さないと、うまくいかないんですね。　「成績が上がるクラスの先生」や「成績が上がる授業をする塾講師」は、あえて「答えを教えない」ということを実践している場合が多いです。

「これはこうすればいいんだよ」ではなく、「これ、どうしてこうなるのか考えてみよう!」と考える時間をとり、生徒が自分で答えを出せるところまでサポートする、コーチングの技術を持っています。　その際には、先生は生徒が自分の想定する答え以外のものを出しても、「よくがんばったね」とほめて、そのうえで軌道修正をします。決して、「答えに辿り着けなかったこと」を否定したりはしないのです。　これは、勉強の中身だけでなく、勉強そのものに関しても言えます。良い子ほど、親や先生の顔色を気にして、短期的な結果に拘泥してしまう場合があるのです。ちょっと悪い成績だっただけで過度に落ち込み、「親や先生に顔向けできない」となってしまうことも多いのです。

■親が喜んでくれるから頑張る一方で・・・

小さいときに「良い子」で成績がよく、「親が言うから」「親が喜んでくれるから」というモチベーションで勉強し、その結果として名門と呼ばれる中学校に入ることができた子が、思うような成績が取れなくなってしまったことでモチベーションが著しく下がり、成績が一気に落ち込んでしまうことがあるのは、ここ数年でよく指摘されていることです。これも、「良い子」を作る教育の弊害だと言えるでしょう。

ですから、**「大人から答えをほしがる『良い子』」**ではなく、**「自分で答えを出す子」**こそ、育てていく必要があるのだと思います。

「親が言うから」「先生が言うから」と思考停止になるのではなく、自分で考えて行動する生徒を育成することのほうが求められるのではないでしょうか？　しかし、それにもかかわらず、子どもの数が減っている今、子どもはどんどん「良い子」になっていると思います。子どもの数が少ないからこそ、子どもに関わる大人が多く、「答え」を教えたり、子どもに期待したり、良い子であることを求めてしまうのです。

最近は教育熱心な親御さん・教育熱の高い親御さんも多いです。ですが、教育に対して熱心な親御さんを持つ子どもほど、結果が出なくなってしまうこともあります。それはきっと、親御さんが求める「結果」を、子どもが過敏に感じ取ってしまい、本当の学力という意味での「結果」と乖離してしまうからなのだと思います。　みなさんは「賢馬ハンス」の話をご存じですか？　昔ドイツで、計算ができる馬が現れました。ハンスという名前の馬は、「2+3 は？」「5−1 は？」などと聞くと、蹄鉄を一定の回数叩いて答えるのです。「2+3」と聞かれると 5 回、「5−1」と聞かれると 4 回叩いて、多くの人を驚かせました。

しかし実は、この馬は計算力があるわけではありませんでした。実は周りの人の呼吸や表情を読み取って、例えば 5 回叩いたときに「お！」という表情をしていた人が多かったら 5 回で叩くのをやめていただけだったのです。　これと同じことが、現在、日本の子どもたちにも起こっているといえます。これは有名な中学受験の塾の先生に聞いたことなのですが、最近小学生の中に、隣の子に採点をしてもらうときに「赤ペンで丸付けしないでくれない？　あとで書き直すから」と頼む子が多いと言います。どうしてそんなことをするのかと聞くと、「あとから親が見るときに、点数が悪いと怒られるんだ」と答えるのだとか。　つまりは「良い子」でありたいから、ということですね。親が求める「結果」・親が求める「答え」を得るために、仮初の「結果」を出すことをしてしまっているわけです。

■試験前に模擬試験の問題入手が横行

　また、あまり知られていませんが、「模試のネタバレ」というのも存在します。西日本新聞の「進研模試、ネット売買横行　全国で 40 万人受検　実施日のずれ悪用」の記事にもあるように、模擬試験の問題を試験前に入手し、いい点を取ろうとする不正行為が後を断ちません。

　いろんな会社・予備校が大学受験の模擬試験を実施していますが、その実施の時期というのは学校や地域によって分かれる場合があります。その実施時期のズレを利用して、模試の出題や答えを不正に入手する行為が横行しているのです。　本来は自分の本当の実力を測るための模試ですが、子どもはさまざまなプレッシャーによって、「いい点を取らなければならない」と強迫観念を持ってしまい、こうした行為をしてしまうわけです。まさに本末転倒ですね。

　そして、これらの行為をしている子の多くは、「まさかあの子がそんなことをするなんて」と周りの大人が言うような、「良い子」だと言われています。大人のプレッシャーによって「結果」に拘泥し、「良い子」でありたいからという理由で、そうしてしまうわけですね。

■自分で考えて答える子に育てる

　結論として、子どもに対して「良い子」であることを求めるのは、子どもを追い詰めてしまい、結局成績も上がらなくなってしまうということです。

「大人から答えをほしがる『良い子』ではなく、自分で答えを出す子になってほしい」と考える大人の数が増えれば増えるほど、こうした現象も少なくなっていくのだと思います。　もしこれを読んでいるのが親御さんであれば、ぜひ理解し、そして「自分で答えを考える主体性を育てる方法」を学んでいただきたいと思います。

西岡　壱誠　：現役東大生・ドラゴン桜 2 編集担当